

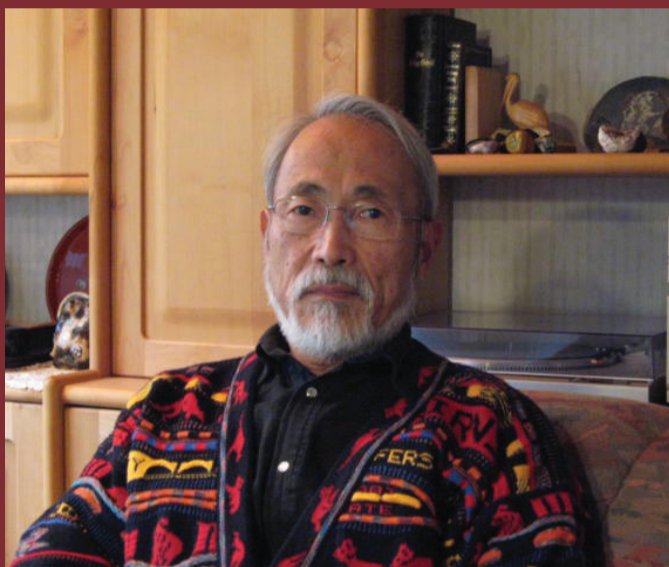


先輩は知っている
欧州で生きるヒント。

僕たちは 「鏡を見れば日本人」 なのです

🇩🇪 医師 中島眞樹さん

医療先進国ドイツで30年以上にわたり、第一線で医療現場に立ち続けてきた日本人がいる。67歳の現在も国内トップレベルの胸部外科医としての手腕を認められ、あちこちの病院から呼び声を掛けられる中島眞樹さんだ。文学を志していた青年は、なぜドイツへ渡り、何を思いながら医師を続けてきたのか？ (Text : Yasuko Hayashi)



1943年4月19日、鹿児島県生まれ。70年3月、京都大学医学部卒業。神戸中央市民病院心臓外科、京都大学医学部胸部疾患研究所・胸部外科での勤務を経て72年12月に渡独。77年4月までシュヴァルツヴァルト地方のレーマーベルク呼吸器センターに勤務した後、帰国し、滋賀医科大学で胸部外科の設立に携わる。82年7月、再渡独。ノルトライン＝ヴェストファーレン州ヘーマーやハイデルベルクなどの病院に勤務した後、88年よりハンブルク近郊のグロースハンスドルフ病院の胸部・肺疾患センター第1医長。2008年5月に定年退職するも、09年に同センター部長として復帰。10年2～10月、同市ハーブルク地区の総合病院の呼吸器センター再建に従事。現在、バルムベク地区の病院の胸部外科新設に携わる。ドイツの呼吸器疾患専門医、外科専門医、胸部外科専門医の資格を持つ。ハンブルク近郊アーレンスブルク在住。医師業の傍ら、絵画制作も行っており、これまでにアーレンスブルクを始め、各地で展覧会を開催している。

医師になった経緯を教えてください。

僕は昔から文学が好きで、大学も文学系の学部に進みたいと思っていました。しかし、肺疾患系の医師である親父を始め、親族の7人が医師という家庭環境で育ったため、当然、僕も医学の道を進むと考えていた家族は猛反対。それで大学に入る気がなくなり、東京へ出て1年間遊んだのです。その間、詩を書いたりしながら過ごしましたが、文学部に入って本当に生きていけるのかという疑問がわいたのと、東京が嫌になったので、結局、京都大学の医学部を受験しました。

当時は学生運動の真っただ中で、僕も毎週末電車で京都から東京へ行き、最前線で機動隊と闘っていました。だから卒業時に「あいつは危険だ」というレッテルを貼られ、就職活動には難儀しましたね。なんとか決まった就職先は、神戸にある病院の胸部心臓外科。小さな頃から親父が毎日レントゲンと向き合っているのを見て、「いったい何が楽しいんだろう？」と思っていたので、一番なりたくなかったのが心臓外科医なんですけどね。

渡独のきっかけはどのようなものでしたか？

神戸で2年間働いた後、医師としても少し医学を学びたいと思い、京大の胸部疾患研究所の胸部外科に入りました。その教授から、シュヴァルツヴァルトの呼吸器センターが手術のできる日本人医師を探しているから、ドイツに行くようにと言われたのです。当時は米国に行きたいと思っていたので、気が進まなかったのですが、その教授がしつこくて。結局、断りきれずに行くことにしたのです。

1972年に初めて訪れたときのドイツの印象はいかがでしたか？

僕はドイツに来るまで、まともにドイツ語を習ったことがありませんでした。だから当初は、患者とのコミュニケーションが非常に難しかったですね。でも、のんびりとした雰囲気の良い病院で、周りの同僚たちが皆、優しくしてくれました。

カルチャーショックというのも特にありませんでしたが、あえて言うなら、僕はお酒が好きなので、「こんなに美味しいビー

ルやワインが、こんなに安く飲めるんだ！」と思ったことですかね。

僕が病院を移ると、 患者の流れもそれに合わせて 移動するようです

1977年に日本に帰国されています。再びドイツに戻られたのはなぜですか？

ドイツでの勤務が4年程たった頃、京大から戻って来いと言われて帰国しました。それまでに勤務先で知り合った妻と結婚し、長男も生まれていましたので、あまりドイツに戻りたいという気持ちはなかったのですが。ただ、日本で次男、三男が生まれ、子どもたちを教育する上で言語が問題になってきました。そこで、この状況は将来的に子どもたちにとって良くないだろうと考え、ドイツに戻ることにしたのです。

その後、現在に至るまでドイツで医師を続けてこられたわけですね。

ドイツに戻り、複数の病院に勤めた後、グロースハンスドルフの病院で20年間胸部外科を率い、2008年5月に定年退職しました。しかし、僕が辞めたらそこを仕切る人がいなくなって手術症例数が減り、病院の評判がどんどん落ちていったのです。そこで院長に再建を頼まれ、職場復帰。その後、ハンブルクの病院から胸部外科の再建を依頼され、今度は別の病院から同外科の新設を任せられ、現在はその準備に携わっています。

僕が病院を移ると、患者の流れもそれに合わせて移動するようです。ドイツの病院の評価は日本と違い、そこに勤める医師次第というところがありますからね。

もう医師の仕事は十分、とは思いませんか？

思いますよ。だからこの間、退職届を出したのです。でも、つい最近まで毎日2～3例の手術をしてきました。今までにこなした手術症例数は約7000例。1年間に200例をこなすとして、35年間毎日休まず手術してきたようなものです。今でも土日急患が入ると、病院に駆け付けて手術をしていますから、「67歳、いまだ現役」ならぬ「67歳、今でも第一線の外科医」です。

日経で決まり!

新聞 + 電子版 = 完全無敵!

日経国際版をご購読されると

電子版を無料

ご利用いただけます。

雑誌の定期購読や、
ラーメン・日本食セットの
特典もあるよ!

電子版にはこんな利点も...

日経朝刊が前日の午後8時(ドイツ時間)にいち早く読めます!

日本人が
起きる前に日経を
チェック出来るんだね!

ドイツ
午後8時

日本
午前4時



★ 電子版のみの海外法人契約も開始しました ★

5 ID 以上で
法人契約が可能です。

基本料金：月額 30 ポンド / 1 ID
3ヶ月毎に請求書を発行いたします。

お申込みはこちらから!

www.nikkeieu.com

4 ID 以下の場合は、お問い合わせ下さい。

お申し込み、
お問い合わせは

ホームページから

www.nikkeieu.com

お電話・Emailで

Tel. +44 (0)20 7562 8220 (Option 01)
Email: subs@eur.nikkei.com